

【臨床心理教育研究領域】

Imaginary Companionの精神的支援について：心の支えとしてのイメージ

荒沢 恵夢

本研究は人が人に対して行うと思われがちな精神的支援を、イメージが行うという、Imaginary Companion現象に焦点を当てたものである。このImaginary Companionは子どもから大人まで幅広い年齢層において見られる。本研究において関心がおかれたのは、①日本における子どものImaginary Companion出現率ほどのくらいか、②このImaginary Companionはこれを持つ子どもの保護者にどのように捉えられているのか、③Imaginary Companionを持つことと関連のある個人的要因はどのようなものか、④Imaginary Companionの精神的支援の形態はこれを持つ年齢の影響を受けるか、の4点である。

これらを明らかにするために、①子どもを対象としたインタビュー調査、②母親を対象としたインタビュー調査、③大学生を対象としたイメージの鮮明度や解離性傾向、創造性についての質問紙調査、④大学生を対象とした精神的支援についてのインタビュー調査を行った。

調査の結果、児童において純粋なImaginary Companionを持っていたのは4.8%に満たなかったが、Personified Objectを含めて考えた出現率は26.2%であった。調査対象となった子どもの約4分の1が、イメージの中の人格とコミュニケーションをとって遊んでいることが明らかになった。このような高い割合でImaginary Companionやこれに類似するPersonified Objectが子どもに所有されているにもかかわらず、母親のImaginary Companion現象についての捉え方は否定的なものが大部分であった。また、Imaginary Companionを持った経験がある者と、Personified Objectを持ったことのある者、どちらも持ったことがない者との間にイメージの鮮明さについて差は認められず、Imaginary CompanionやPersonified Objectを持つことにイメージを想起する際の鮮明性は関わりがないことが明らかになった。さらに、解離傾向と創造的想像のタイプは、Imaginary CompanionやPersonified Objectの有無に関連がないことが明らかになった。精神的支援についての調査結果、Imaginary Companionのもたらす精神的な支援というものは、年齢によっても多少の変化は認められるが、それが出現することとなった基盤に大きく左右されることが示唆された。

乳児の泣き行動における発達変化：保育所での六ヶ月にわたる縦断観察を通じて

大島 希

乳児の泣き研究は新生児・乳児の声の音響の特徴から病態を探索する研究が進められてきた。研究の蓄積により泣き声から原因がある程度推定できることや中枢神経系障害や先天性異常により泣き声が違うことが予測可能とされている。また、泣きの行動的特徴の検討から月齢でその形態や機能が変化することがみだされている。本研究では、乳児保育を実施している保育園で5月～11月まで2名の乳児を対象に2週間1回の

間隔でビデオとレコーダーの記録と自然観察をした。保育園での観察を通じてみいだされた泣き行動の頻度と持続時間の特徴を発達検査による心的機能の変化や身体的変化に伴いどのように変化するかを検討した。その結果、月齢の経過に伴い泣きの頻度・平均持続時間が減少していく傾向が示された。これは、泣きとむずかりの分化による使用形態の選択や経験・学習にともなう泣きの意図性の上昇を示していると考えられる。本研究の乳児保育における臨床心理学的意義は、乳児の関係性を示す行動の検討を通じて乳児の豊かな心的発達をみる視点や乳児と環境との関係性に表れてくる意味について考える示唆をあたえてくれたものと考えられる。

Solution-Focused Approachにおける「初回面接公式課題」の機能について

佐々木千尋

本研究で取り上げるSolution-Focused Approachは、Brief Therapyのモデルの1つであり、医療・教育場面をはじめ、さまざまな現場での臨床実践において有効性が多く報告されている。特徴としては、クライアントの問題やその原因の把握ではなく彼らの肯定的な側面に注目し、問題の解消ではなくクライアントが望む解決の構築を目指す。「初回面接公式課題」はその過程でクライアントが望むものが明確でない場合に用いられる観察課題の1つで、日常の出来事から「今後も起こってほしいこと」に注目するよう促す。この課題によって生活の中の問題点ではなく好ましいことについて予期的に注意を向けることになり、多くの場合好ましい出来事と具体的な変化が報告され、それは解決に向けての重要な指標とされる。代表的な課題の1つであり、最も一般的で安全であることや応用性についても示唆されるこの課題についての研究はいくつかあるものの、課題を用いた場合の治療効果への影響に関するもので、課題への反応過程や機能について十分に検討されているものは見られない。よって本研究では、この「初回面接公式課題」について、いくつかの面から検討を試みた。

はじめに、課題による予期的な観察が出来事の報告に与える影響に関して調査を行った。課題の応用的方法を用いて肯定的出来事を想起した場合と観察してきた場合の報告について面接による調査を行った。その結果、観察によって出来事の報告数が増加するというより、むしろ小さいことに注意を払うようになることが示唆された。次に、この課題が望む方向（目標）の明確化や状況の改善にどのような影響を与えるかについて、課題の有無による2群を設定し、目標に関しての主観的变化、認知面での変化について評価尺度を用いて質問紙調査及び面接による調査を行った。肯定的出来事の報告数は課題がある場合に多い傾向が見られ、記述が詳細であったが、その他のついて明確な差異や変化は見られなかった。これらのことについては今回の調査方法等について検討すべき点が多いと考える。実際の面接においても、観察によって認識された肯定的出来事がすぐさま現状についての評価を上げるといような単純なことではないだろうが、より小さなところに注目して報告されることが示唆されたその内